
飽食の罭

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飽食の罨

【Nコード】

N4171M

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

園子の夫、栗山修一の父親が他界し、自宅と畑、それにアパートを貰い、

修一の妹の美津子は、千葉駅前の五階建てのビルを相続した。

ビルにはテナントが入っており、一、二階にはパチンコ屋が入っていて、美津子の夫の岩渕恒夫が園子にパチンコの醍醐味を教えるが、その裏には罨が……。

飽食の罨

滝 龍太郎

1

「一千万円が目一杯というところですね」

栗山園子が、東西銀行千葉支店の融資窓口で担当者に言われた。

二年前、園子の夫、栗山修一の父が他界し、相続税を払った後に今の住まいといくらかの畑、父が将来のためにと空いている土地に建てた八世帯のアパート、それと千葉駅前有五階建のビルが残った。

母は既に亡くなっており、身内は妹の美津子だけである。

修一は長男なので住まいと畑、それにアパートを貰い、五階建のビルは美津子が貰った。

そのビルには、一、二階にパチンコ屋が入り、三、四、五階には、スナックやら雀荘など六軒のテナントが入っていた。

毎月の家賃はかなりのもので、もともとやまっ気のある美津子の夫、岩淵恒夫はその日を境に会社を辞め、ぶらぶらしている。

そんな妹夫婦を見ていると、園子は無性に腹が立った。

長男でなければ駅前のビルを貰い贅沢が出来たのにと、園子は財産を貰ってから修一の生真面目な性格が鼻に着いていた。

そんなある日、園子はビルの様子を見に、パチンコ屋を覗いた。立地がいいのか出玉がいいのか、ウィークデイの昼間だというのに空いている台を探すのが困難なほど混んでいた。

園子は、結婚する前、女友達に連れられてよくパチンコに付き合

わされていた。そんな事で、パチンコの醍醐味は良く知っていた。
だが、今日はそれを満喫しに来たわけではないので、店内を一周して帰るつもりでいた。

「義姉さん」

突然、後ろから声を掛けられた。

振り向くと、恒夫がにやけた顔をして立っていた。

「義姉さんもパチンコをやるのですか？」

義理の弟らしく、控えめに言った。

園子は返事をしなかった。

「義姉さん、すぐ出る台があるけどやってみませんか？」

恒夫は低姿勢に出て、園子を促した。

園子は、恒夫の低姿勢もさる事ながら、醍醐味を知っているので食指が動いてしまった。

さつ、どうぞと言い、恒夫は自分の座っていた席に園子を座らせ、恒夫が何発か弾いてみた。玉がチェッカーに入りドラムが回った。回っているドラムに目を据えていると、数字が777と揃って止まった。電子音が鳴り、台のあらゆる所が一斉に点滅し出した。

園子は、けたたましい電子音と、目の前の赤や青の点滅を見て興奮してしまった。

そして、いつの間にか足元にはドル箱が重ねられ、恒夫にほぼ笑むようになってしまった。

結局、ドル箱は六箱になり、子供の帰る時間になってしまったので、園子は後ろ髪を引かれる思いでパチンコ屋を出た。

不合理なうつぶんを、一時的ではあるが忘れる事が出来た園子は、足取りが軽くなった。

ところが、これが園子の転落の始まりであった。

修一とやっていた時でさえ、ドル箱を積み上げるといふ事は夢であり、それが出来た快感は忘れる事が出来ず、園子は毎日通うようになってしまった。

最初の内は、恒夫がよい台を確保してくれたので勝ち続けたが、

その内その台がだめになり、負ける日が続いた。

「どうしたの、もつといい台を探して！」

園子は、恒夫に対して、すっかり義姉として振る舞っていた。

恒夫は、最初の内は出る台を園子に渡していたが、頃を見て、出ない台に替えていた。

ビルのオーナーという事で、出る台を確保するのは簡単で、園子を夢中にさせるまでの間ラッキー台を提供していたのである。

元来遊び人の恒夫は、経済的にゆとりができ、好きなパチンコもラッキー台をくれる店に飽き飽きし退屈していた。そんな時、義姉の園子を見つけたので退屈しのぎにからかったのである。

栗山家は元々農家で、田畑はあったが現金はなく、駅前のビルとアパートはバブルに乗り、いくらかの田畑を売り東西銀行の口車に乗り購入したものであった。

バブル崩壊後、今となれば購入しておいたのが幸いとなっていた。畑などはバブル期から見れば二束三文しかならず、そのままの状態ではあってある。

修一は真面目一辺倒の人物で、家と会社を往復するだけで、小指の先ほどのやまつ気もなかった。そんな事で、園子の欲求不満は募るばかりであった。

そんな時に、恒夫の罠に嵌まり、後ずさり出来ない状態になってしまった。

一日五万円や六万円は当たり前で、多い時は十万円以上の金が消えていた。

最初の内は自分のへそくりで賄っていたが、その内預金を崩し、ついにサラ金に手を出したのである。

最初は十万円、二十万円と借りていたが、それでは足らず何カ所から借りるようになり、その額が利息を含め一千万円を超えてしまい、自分ではどうにもならなくなってしまった。

そこで、まとまったお金を作るため、アパートを担保にして借りようと、東西銀行に来たのである。

園子は、いくらバブル崩壊後といっても、二千万円は貸してもらえんと思っていた。

「たった一千万？」

園子が怪訝な顔で言った。

「ええ。担保的にはあるのですが、アパートというのはいっ住んでいる人が出て行くかも知れません。そうすれば今の家賃は入って来ないので。」

担当者の言葉に、ふんふんと園子が頷いた。

「その時の事を考えて、出来る限り少なめにした方が良いのです。何も担保に入ってないのですから、もう少し上乗せしてと言うのはわかりますが、株の変動は危ないですからね。」

担当者がジロリと園子を見た。

園子は、資金使途の欄に株の購入と書いたのである。

このローンは、資金使途は何でも良かったので、一千五百万円を申し込むのにそれしか頭に浮かばなかったのである。

「うまい話には落とし穴がありますので十分注意して下さい。上がりがいいからといって、危険なものは買わないで下さい。」

「そんなのわかってるわ。それより、どうしても一千万円以上は無理なんです。」

園子が粘った。

一千万円ではどうしようもない。サラ金だけで一千万円ある。パチンコの軍資金も必要である。せめて三百万円は持っていないと気が落ち着かないのである。

思惑は外れてしまったが、サラ金会社に半分払って残りを軍資金にすればいい、と甘い考えが脳裏を横切った。

「いいわ、一千万円で。」

今までの粘りが嘘のように、園子があっさり言った。

担当者は、園子の観念した顔を見て融資の説明をした。

その中で、担保提供者が来て署名捺印の必要があると言われた。「主人が来なくてはいいじゃないか？」

名義は主人になっているので、妻が代行してはだめなのか聞いてみた。

「アパートの名義はご主人ですよね」

「ええ」

「それではご主人に手続きをしてもらわないとだめですね」

園子は困った。当然、夫には内緒であつた。

「そうですか。土日はだめなんでしょう」

園子は咄嗟に思いついた事を言った。

「ええ、営業日でないと。一時間ぐらいで終わりますので、何とか時間を取って貰いたいのですが」

「困ったわ。とても忙しいと言つてましたし、来週から出張で仙台に行つてしまうのよ」

出張など出鱈目であるが、ここまで切羽詰まると、つい嘘が口から出てしまつていた。

「それは困りましたね。このお金はいつ必要なんですか？」

「来週中には要るんです」

そんなやり取りをしている時、時々訪ねてくれる外回りの担当者が帰つて来た。

「あつ、竹村さん」

園子が名前を呼んだ。

竹村が頭を下げ、融資の窓口に来た。

「融資ですか？」

人懐っこい顔で、園子に聞いた。

「ええ、でも困つてるんです」

園子が竹村に助けを求めた。融資の担当者から説明された竹村は、古くからの大事なお客様だからと説得してくれた。その結果、融資の書類一式を園子に預け、署名捺印の後持つて来てくれれば良いと言つてくれた。

助かった。園子は竹村に礼を言い、胸を撫で下ろした。

権利証は家の金庫にあるし、実印も印鑑登録のカードも金庫にあ

る。

園子は家に帰り、それらを確認し融資書類に目を通した。

（これに主人の名前を書けばいいのね）

園子は自分で書くつもりでペンを取った。が、自分の自筆が銀行にわかつている事を思い出し、ペンを置いた。

（いけない、いけない）

融資の申し込みの時、その場で夫の名前を書いたのである。

（困ったわ）

男の自筆で書かなければ疑われてしまう。かといって気の許す男の知り合いなどいない。

園子は考えたあげく、恒夫の事を思い出した。

（そうだわ。恒夫さんに書いてもらおう。元々はあの人がいけないんだから。当然やつてもらうべきだわ）

園子は勝手に決めつけ、市役所へ行った帰りにパチンコ屋を覗いた。

（いたいた）

園子が恒夫の側に行き肩を叩いた。

「義姉さん」

久しぶりなので、恒夫がハツとした。

「何をびっくりしてるのよ。ご無沙汰してるけど、また来るからね」
資金が底を尽き、ご無沙汰していた園子は、電子音の音に我を忘れてうつとりした。

恒夫の足元にドル箱が四つつも積まれている。

「私のいない間に、随分と稼いでるんじゃない？」

園子は、皮肉ではなく羨望の眼差しで恒夫を見た。

「ええ、まあ」

恒夫が躊躇してはにかんだ。

「あんたに頼みがあるのよ」

恒夫さんとは呼ばずに、既にあんたと呼んでいた。

園子が、無理やり恒夫を外に連れ出し喫茶店に入った。

「何なの？」

怪訝な顔をして、恒夫が口を尖んがらせた。

「書いて貰いたいものがあるの」

園子はそう言つて、テーブルの上に融資の書類を出した。

「保証人はだめだよ。それでもビルのオーナーなんだからな」

お金のない時は、だれかれ構わず一割で保証人を引き受けると吹聴していたのだが、財産を持つと変わるものである。

そんな事を考えながら、園子がビシツと言った。

「何よ。あのビルは本来ならばウチのものなんだからね。偉そうな事言うもんじゃないよ」 園子の言葉に、恒夫が小さくなった。

「あんたに保証人を頼むくらい、まだ落ち込んでないからね」
追い打ちをかけられ、恒夫は黙ってしまった。

「ここに主人の名前を書いてほしいのさ」

園子が書類の氏名欄に指をさし、恒夫に言った。

「これは借用証じゃないか」

恒夫が、金銭消費貸借という字を見て園子に言った。

「ええ、そうよ。でも、だれにも内緒だよ。元はといえば、あんたがいけないんだからね」

「俺が？」

「そうよ。あんたがパチンコを煽るから嵌まってしまったんじゃない」

「そんな。俺の責任かよ」

冗談とばかりに、恒夫が園子を見た。

「まあ、責任はないけど。嵌ませたのはあんただからね。だから何もごちゃごちゃ言わないで、主人の名前を書いてくれればいいのよ」

園子が澄ました顔で言った。

「わかったよ」

恒夫は観念したように、園子に聞きながら栗山修一の住所氏名を書いた。金額の欄にも、恒夫の自筆で一千万円と書いた。

「一千万か」

恒夫がボソツと言うと、

「一千万円じゃ足りないのよ」

と、園子が言った。

「足りない？ 何に使うんだ？」

恒夫は何に使うか知っていたが、とぼけて聞いてみた。

「とぼけないでよ。毎日十万もの金をどこで工面してたと思ってるの？」

園子は顔を真つ赤にし、恒夫を睨んだ。

「預金を崩してたんじゃないのか？」

「そんなにあるわけないじゃない。サラリーマンよ。主人はバカだから、母屋が残ればいいなんて言って……。馬鹿よ」

そのおかげで恒夫は贅沢が来ている。駅前ビルの家賃収入だけで十分な生活が来ている。そして、好きなパチンコを一日中やっていられるのである。しかも、店からいい台を提供されて。

「サラ金？」

恒夫が察したような言い方をした。

園子は黙って頷いた。

「一千万も？」

「もうちょっと」

「足らないのか」

「ええ」

「後いくらあればいい？」

「五百万」

「よし、俺がなんとかしてあげる」

「ほんと！」

園子の顔がほころんだ。

「義姉さんのためだ。何とかしてあげるよ」

「ほんとね。ありがとう」

園子は、恒夫の言葉に頼もしさを感じた。

東西銀行から借りた一千万円と、恒夫の知り合いと称する金融会社から借りた五百万円を足して、サラ金に返済し三百万円が残った。

東西銀行の返済は毎月の家賃収入で十分事足りた。

金融会社の返済は先に利息分として百万円を払い、後は五百万円を毎月五万円の百回払いでいいという事であった。担保はアパートで、東西銀行の後に付けた。

「あんたは顔が広いわね」

「まあね」

恒夫は、園子が転げ落ちるのは時間の問題だと思っている。

「普通なら、こんな返済で貸してくれるわけがない」

「そうね。あんたに感謝するわ」

「それより、三百万の資金があるんだから取り戻さない」と

恒夫は、園子の機嫌を取りながらさりげなく煽った。

「そうね。これだけあれば取り戻せるわね」

園子は恒夫に煽られ、早速パチンコ屋へ向かった。

「義姉さん、ちょっと待ってて」

店に入るや否や、恒夫は園子を残して店の奥に入って行った。

電子音の響き渡る中、園子はイライラして待っていた。回りをみると、ドル箱を足元に積んでいる人がかなりいた。

（やっぱり、このパチンコ屋は出るのね）

園子は一人で納得していると、奥の方で恒夫が手招きした。

そして、園子は一番奥の台に座らされた。

「特別な台だ」

恒夫が園子の耳元で囁いた。

園子は黙って玉を弾き出した。

恒夫が、パチンコ屋の店長に特別な台を頼んでおいたのである。

案の定、フがすぐに揃い、しかも連チャンである。

今日は、最初のころと同じように稼いで貰わなければならなかった。

そして、最初と同じように、罫に嵌まって行くのである。

園子はニコニコしながら玉を弾いている。気分を変えてやると出るのねなんて言ったり、サラ金の借金がなくなっただので気が楽になったのがいいのね、なんて言葉まで出て来た。

恒夫は相槌を打ちながら、甘いもんだと思った。

園子は久々に勝ち金を手にし、頬が緩み一千五百万円の借金など眼中になく、パチンコで儲けた事の方が大きな出来事と感じている。翌日、園子は子供達を学校へ出すと、以前のようにパチンコ屋へ行き、開店前の列に並んだ。

恒夫がいる時はなにも並ばなくてもいいのだが、遊び人の恒夫は朝が遅く、顔を出すのはいつも昼過ぎである。そんなわけで園子は開店前の列に並び、回りから情報をキャッチし、自分でラッキー台を選ぼうとした。

そして、選んだ台で調子づいていると恒夫がやって来て、もっといい台があるからと言われ、恒夫の罫に嵌まるのである。

園子は恒夫を信用しているので、そんな事とは知らないのである。たまにはいい台をくれる時もあるが、それは何回かに一回の割合であつた。

恒夫は上手く飴と鞭を使い分け、園子を適当に操っているのである。

多額の借金、それも銀行の他にわけのわからぬ金融会社。恒夫の知り合いと言うが、今回の融資話は全て恒夫が指図していた。

そんな事を知らない園子は、恒夫は味方と思いパチンコに興ずるのであつた。

園子の戦績は、以前と同じで何十万円かのお金が週単位でなくなつて行つた。

（このままではまた同じだわ）

園子はパチンコの醍醐味を知っているだけに、その魅力に負けてしまっている。資金がなくなれば、また恒夫に言っであの金融会社から融通して貰えばいいと安易な気持ちでいた。

「義姉さん、どうですか？」

恒夫が、園子の肩に手を掛けて聞いてきた。

「だめよ。いい時と悪い時が極端なのよ」

園子は恒夫の手を払うでもなく、玉の行方を凝視している。

「そうですか。この台はいいわけなんですけどね」

恒夫は園子の背後でニヤリと笑った。

デジタルはよく回るのだが数字が揃わない。数字は惜しい並びばかりで、園子としては途中で止めるわけにいかなかった。ある程度で見切りをつけて他の台に行けばいいものだが、かなりの額をつぎ込んでしまうと他には行けなくなる。諦めて他に行った途端、違う人が座つてすぐに揃う事がよくあるからだ。

「義姉さん、あまり熱くならない方が・・・」

もはや、恒夫の言葉など聞こえない。もう何十回となく揃いそうに揃わないのである。

昨夜、そろそろ仕掛けなければと思い、恒夫が店長にかなりの金を握らせ、園子が弾いているこの台に特殊な細工をしたのである。チェッカーには多めに入るようにし、デジタルの数字を惜しい並びに何度も来るようにしたのである。そして、フィーバーを極端に抑え、たとえフィーバーしても連チャンしないようにし、次のフィーバーまでの間は、惜しい並びの連続になるのである。

「おっ、来たか」

恒夫が７７と来たのを見て言った。

もはや園子には言葉もなかった。

そして、最後の数字は６で止まってしまった。

「惜しいなあー」

恒夫がわざとらしく言った。

「こればかり」

園子がボソツと言った。

「こんなのばかりなのよ。まだ一度も掛かんないんだから」

園子が、たまりかねたように後ろを向いて恒夫に言った。

「そうか、ひでえ台だな。じゃ、かなりやられたんじゃないの？」

恒夫が心配する口ぶりで言った。

「もう大変よ」

園子は、いくら負けたとは言わなかったが、相当突っ込んでいるのではないかと恒夫は思った。

「金、大丈夫？」

恒夫は体をかがませ、園子の耳元で聞いた。

「もう少しでなくなるわ。全く。取る時より取られる時の方が多いんだから」

園子が、ぶつぶつと台に文句を言った。

そんな事を言っている間にもデジタルは回転し、惜しい数字が並び続けた。

（店長の技術はたいしたもんだな）

恒夫はそんな数字の並びを見て、一人感心していた。

その間にも、園子は一万円札を何度も両替に行っている。

「義姉さん。ちよつと休んだ方がいいよ」

恒夫が、いかにもたまりかねたような言い方で言った。

「機械というのはムキになると向こうもムキになってくるから、ちよつと休ませてあげた方がいいかも知れない」

恒夫がそう言つて園子の肩をポンと叩いた。

園子は、未練がましくデジタルの数字を見つめていたが、デジタルが止まると、そうねと言つて椅子から立ち上がった。

パチンコ屋の入口の横に、ジュースやらタバコやらの自動販売機があり、テーブルがいくつか置いてある。

「はい、義姉さん」

園子が座ると同時に、恒夫が冷たい缶コーヒーを差し出した。園子はそれを一気に飲み干し、ため息をついた。

「義姉さん、そろそろ止めた方がいいんじゃないですか」

恒夫が冷たい表情で園子を見た。

「何を？ パチンコ？」

「そうです」

「何をいまさら。冗談じゃないわ。元はと言えばあんたが誘ったんじゃないの。この穴を埋めるまでは止められるわけがないじゃない。そんな事、あんたが一番良く知ってるくせに」

園子が恒夫を睨んだ。

「ええ、それはわかりますが。義姉さんは楽しんでるんじゃない。取り替えそうとムキになっている。これじゃどんなにいい台に当たっても無理です」

恒夫が諭すように言った。

「じゃ、どうしたらいいのよ。一千五百万もの金儲け、他にあるとでも言うの？」

「ああ。義姉さんさえその気なら」

恒夫の言葉に、園子が一瞬目を剥いた。

「危ない事じゃないでしょうね」

園子は、期待と不安が入り交じった顔をした。

「そりゃ、多少はあるけど、気にするほどじゃない。ただ、資金がある程度はないとダメだけど……」

恒夫が園子の顔を見た。

「どのくらい？ どのくらいあればいいの？」

園子がすがってきた。

「そうだな……。一千、いや、五百でもなんとかなるな」

恒夫は、自分に言い利かせるように言った。

「五百ね。あの人、あと五百ぐらい貸してくれるでしょ？」

園子は、前に五百万円を融通してくれた金融会社の事を聞いた。

「それは何とも言えないけど、話だけ話してみるよ」

恒夫は、わざと乗る気のない素振りをした。

無理かも知れないという事を、園子に仄めかさなければいけない

からだ。簡単に大丈夫などと言うともつと借りられるのではないかと思われてしまい、せっかくの儲けがなくなってしまうからである。「ねっ、お願いよ。このままでは大変なのは、あんたが一番わかってるでしょ」

「ええ、まあ」

恒夫はしぶい顔をしたが、心の中では笑っていた。

「弟としては、しょうがないか。すぐに連絡してみるよ」

恒夫はしかたがないといった表情で椅子を立ち、公衆電話に向かった。

園子の後ろを向いたその顔は、綻んでいた。

3

「栗山さん。岩渕さんからの紹介ですからなんとか引き受けましたが、これ以上は厳しいですね」

大川と称する金融会社の主が言った。

「でも、相談に乗ってくれるっていう話でしょ？」

園子が恒夫の顔を見て、すぐに大川にきつい顔を向けた。

「それは・・・」

大川が言いかけながら、恒夫の顔をチラッと見た。

恒夫は園子の横に座っている。その向かいに大川が座っている。

大川はタバコに火をつけようとして、さりげなく恒夫の顔を見たのである。

恒夫も、園子に悟られないようにさりげなく、大川の顔を見て片目を瞑った。

「担保的にはいくらか余裕はあるんですけど、返済的には目一杯なんです」

「返済的？」

大川の言葉に園子が聞き返した。

「ええ。ご主人には内緒なんですよ？」

「ええ」

園子が頭をコクンと下げた。

「そうすると、今の返済と東西銀行からの返済を合わすと、奥さんのへそくりや家計費からでは限界なんです」

園子は返答出来なかった。事実、家計のやりくりが大変になっていた。夫の給料だけではまかないきれず、アパートの家賃収入にまで手を付けているのが現状であった。アパートは全て園子が管理しているの、夫には何も知られていなかった。

「相談に乗るといふのは、ご主人に話をして同意を得られれば、あと五百何とかしようと言う事です」

「それは出来ないわ」

園子が真顔で言った。

「恒夫さん、そんな事あんたが一番よく知ってるでしょう」

恒夫に言った。

「そりゃよくわかってますけど、ここまで来たらそれしかないでしょう……。それとも、大川さんに買い取って貰うしかないですよ」

「そんな事、よけい出来るわけないでしょう！」

恒夫の言葉に、園子が怒鳴った。

「岩渕さん、そりゃ無理だ。いくら岩渕さんの頼みでも、買い取りは出来ない。買い取れば売らなければならぬからね。今時、投資でアパートを貰う人なんかいるわけない」

大川が恒夫に言いながら、園子の顔を見た。

「今のご時世じゃだめですか」

恒夫はがっかりした調子で言った。

その言葉で、しばらく沈黙が流れた。

「ところで、つかぬ事を聞きますが、その金を何に使うのですか？」

大川が沈黙を破り、紳士的に聞いてきた。

園子は下を向いたまま喋ろうとしない。

それを見て恒夫が口を開いた。

「実はちよつとした金儲けがありまして、それを元手に大川さんから借りている分と、東西銀行からの分も併せて返そうと思ひまして」「そんな儲け話があるんですか。私も仲間に入れて貰いたいな」

大川は、園子が下を向いているのをいい事に、ニヤニヤして恒夫に言った。

「まあ、内密な話でして」

恒夫は、園子の手前、言葉を濁した。

「しかし、その話が確実ならすぐに金を返して貰えるわけですね」

「そりゃ、確実な話です」

「だったら、買い戻しの約束をしてくれれば買ってもいいですよ」

大川が園子の反応を見たが、園子は俯いたまま、何も言わず何かを考えていた。

「一旦買い取りをして、すぐに栗山さんに買い戻して貰いましょう。確実な話でしたら、出来るじゃないですか。なに、契約書の上だけにして名義を移さなければ、ご主人にはわかりっこないですから」「ほんと？」

大川の言葉に、園子が恒夫の顔を見た。

俯いて考えていたが、主人にはわからないと言われ、顔を上げ恒夫に聞いた。

「ええ。名義を変えなければ大丈夫です。契約書の上だけなら何の心配もいらないます。そして、すぐに買い戻せばだれにもバレずにすむ」

恒夫が、園子に心配ないからと言った。

「そうすれば五百万貸してくれるのね」

「ええ、そうです。貸すのではなく、あげるのです」

「そうね」

園子は、事のいきさつがわかってきた。

「よかったですね」

恒夫が言った。

「後はあんた次第よ。今までの分を全部取り戻すんだから」

恒夫の術中にどんどん嵌まって行く園子だが、そんな事とは小指の先っぽも疑っていなかった。

翌日、大川の事務所で売買契約を行った。

売買金額は二千万円で、本日手付金として一千万円。残金は一カ月後に払う事とした。

既に五百万円を貸しているの、それを差し引いて五百万円の現金を園子に渡した。

そして、特約条項として、本日より一カ月以内であれば売主が買い戻せる事が書いてあった。

「これ買い戻しの特約です」

恒夫がもつともらしく説明した。

「ええ、これね」

園子は、その条項を見て安心した。

「持ってきて頂いた権利証と印鑑証明書、それに委任状は買い戻す時まで保管させてもらいます。そうでないと私には保金がないですからね」

恒夫からその旨を聞かされていたので、園子は承知したと頭を下げた。

「五百万の現金と、貸した五百万の借用証です」

大川は五百万円の現金と、借用証を園子に渡した。

「今日付けで、貸した五百万はこれで返してもらいました。ですから返済はもうしないで結構です」

「はい」

借りた五百万円は払わないで済むし、目の前に五百万円の現金はあるし、園子は何か得した気分になっていた。

「さあ、義姉さん。これを元手に儲けましょう。一カ月の内には、小遣いだって出来ますよ」

恒夫の調子のよい言葉が、園子の脳裏に焼き付いていた。

恒夫の儲け話は博奕であつた。

恒夫の遊び仲間に久夫というのがいて、その友人にルーレットのディーラーをしているのがある。もちろん地下組織の博奕である。

瀬沼というそのディーラーは腕がいいのを見込まれて、ある組織に入り一流のディーラーとして働いている。

一流のディーラーともなれば、客の張ったチップを見て店が儲かるか客に儲けさすか、ある程度は自分で目を出せるのである。

瀬沼のその技巧は、博奕の常套手段である最初勝たせておいて最後に身ぐるみ剥がすやり方を、頃合いを計つてうまい具合に仕掛けるのである。

大負けしている客にはうまく中負けぐらいにしてやり、大勝ちしている客には中勝ちぐらいに持つて行く。大負けをすると来なくなつたり警察に通報されたりするからである。逆に大勝ちすると人に吹聴したりするからである。

そんなこんなで、ほど良く客を遊ばせ、ほど良く儲ければいいのである。また、客が玄人の時は徹底的にやつつけてやればいいのである。

久夫は常に小勝ちをして帰る。小勝ちならば店から怪しまれないからである。

それは、瀬沼が久夫の張ったチップを見て勝たせているからである。小勝ちといつても、百万円前後の金は持つて行く。そして、後で瀬沼にいくらかやるのである。もちろん、こんな事がバレてでもしたら大変である。そんな事は瀬沼が一番わかっている。

組織としては、そんな事をされたんじゃ損害どころかメンツが立たないので、たまに客に紛れ込んでスパイを送る事がある。

ところが、瀬沼のような一流になればチップの張り方や客の雰囲気、組織の人間がどうか見破る事が出来る。

組織の人間がいる時は、久夫に合図を送りいくらか負けさせて帰るのである。

その久夫に、恒夫が話を持ちかけた。園子には言えない内密な話である。

そんな事とは知らず、恒夫に従って園子が着いてきた。

久夫の紹介で入れたものの、危ない連中ばかりかと思っていた園子は、啞然とした。

トランプ台に向かっている男女。ルーレットを見つめている老いた紳士と淑女。大企業の部長と言われてもおかしくない風格の人。そんな紳士淑女がトランプやルーレットに興じている。まるで、映画に出て来る場面と一緒なので園子はホッとしている。

正直言って、恒夫から地下組織のルーレットと言われ、危ない人たちの集まりと思っていた。そんな中で儲ける事が出来るのかと、不安でいっぱいだったが、この華やかな光景を見て園子はすっかり安心してしまった。

園子は百万円をチップに替え、恒夫と一緒に瀬沼の台に座った。

「凄いわね」

「ああ。久夫の言う通り、ネクタイに背広じゃないと入れないという事がわかったよ」

園子と恒夫は、回りに聞こえないように小さい声で喋った。

赤と黒にまとまったチップを掛けて、数字には少ないチップを掛けるように、そして、ほど良く儲けたら終わりにするよう久夫に言われていた。

ほど良く儲けるとはどのくらいなのかはわからないが、とにかく、園子はチップを張った。

赤に十万、数字に一万分のチップを張って様子を見た。

まずは赤に入り、数字に掛けた一万のチップは取られたが、二十万分のチップが戻ってきた。

次も同じで、その次は取られてしまった。

（二回勝って一回負ける。このパターンでやるつもりだな）

恒夫が瀬沼を見た。

瀬沼は素知らぬ顔をしている。

当然である。客が勝ったり負けたりしている時に、いちいち笑顔を作ってはられない。

「よし、次は倍にしよう」

恒夫が、園子に二十万分のチップを張るように言った。

思った通り色が当たり、倍のチップが戻ってきた。数字の方は外れである。

その後、恒夫はチップを三十万分にしたり、取られそうな時は十万分にしたり、真剣にやっているのだと周囲に感じさせる必要があった。

（同じパターンばかりではディーラーが可哀想だからな）

園子のチップの山は、すでに二百万円分になっていた。

「義姉さん、いいかい」

「え？」

「ギャンブルというものは、たとえ勝ち続けていてもずっとやっているとは最後は負けるようになっていく。潮時というものが大事なんだ。今のところ百万は勝っているの、この百万を賭けて今日は終わりにしよう。最高額の百万で一発勝負だ。もし負けたとしても元だ。勝てば二百万の儲けだ。それをもっと儲けようと助平根性を出してやっていたら、それこそ全部なくなってしまうかも知れない」

恒夫がもっともらしく園子に言った。

恒夫は、この最後という言葉で瀬沼に聞いて貰いたくて、園子に言ったのである。

「そうね。あんたの言う通りかも知れない」

園子は、恒夫に従った。

最後と聞かされた瀬沼は、いつもより真剣に事を運んだ。

そして、園子のテーブルには三百万円分のチップの山が出来た。

「やったわ」

園子は満面の笑顔で恒夫を見た。

「さあ、帰りましょう。今日はついていた」

恒夫が周囲の人に聞こえるように言った。あくまでも、つきを強

調して店を出た。

まだ午後二時であつた。一時に入り、一時間で二百万円の儲けである。

「久夫に五十万やればいいだろう」

喫茶店に入り、座ると同時に恒夫が言った。

「そんなにやんなきゃいけないの？」

「ああ」

園子は不満な顔をしているが、恒夫は知らん顔をしていた。

「だって、私たちがいくら勝ったかわからないでしょう」

ディーラーの瀬沼の事は、園子に何も話していない。

「いや、それが仁義つてもんだ。また勝たせてくれるんだから安いもんさ」

恒夫が軽く言った。

「そうね」

園子は納得したものの、顔は不満顔だつた。

そこへ、コーヒーとレモンティが運ばれてきたので、一時沈黙が流れ、二人は飲み物を口にした。

苦いなどぶつぶつ言いながら、恒夫はズルズルと下品な音を立ててコーヒーを飲んだ。

「カクテルが甘かったせいか、やけにコーヒーが苦いな」

ルーレットをやりながら、恒夫は盛んにカクテルを飲んでいた。

「あんなに飲んで大丈夫なのかと思つたわ。負けたらどうしようかと・・・」

園子はバッグの上に手を乗せ、ニンマリした。

「まあ、奴の言う通りやったまでだがね」

恒夫が得意になって言った。

「凄いわね。あの久夫って人、見直したわ。今度は私にも教えて」

「それはだめだ」

「どうして？ お金を出しているのは私よ」

「それでもだめだ。奴はあれで命がけなんだから」

「どうして？　ただルーレットに詳しいだけでしょ」

園子は、久夫がルーレットに長けてるだけだと思っている。それは無理のない事はあるが。

「まあ、奴は奴であそこまでするには相当な苦勞があつたわけだ。その苦勞をして覚えたものを人に教えるなんて、ちよつとそつとは出来ないだろう」

恒夫が大袈裟に言つた。

「じゃ、なぜあんたに教えたのよ」

「そりや、今までに随分と面倒を見てやつたからな。それに、俺なら裏切る事はしないし、奴も小遣いになるからな」

今日は久夫が張つたわけではないので、久夫の取り分は少ないだろうと恒夫は思つた。

「ふうーん。仁義だなんだつてやつね」

園子は、ようやくわかつたようである。

「まあ、いいわ。そつちはあんたに任せるから。とにかく、今日は百五十万儲けたんだから。後十回行けば、一千五百万。これで全部返せるわ」

園子の甘い夢は、ハイエナの格好な餌食であつた。

そのハイエナである大川と園子との約束事は、契約書に書かれた一カ月以内であれば買い戻す事が出来る事と、園子に金が出来なかつた時は、口約束であるが相談の上善処するといふものであつた。

大川は、そんな事は最初から守ろうなどとは思っていない。それどころか、買い戻すなどとはとんでもない事であつた。

日本の法律では、契約を結べばその時点で所有者は大川に移るのである。決済前で名義は栗山であっても、登記は第三者に対抗し保護するだけであつて、大川は契約書があるので第三者に売る事が出来る。ただし、特約条項の買い戻しは生きてくるが、そんな事はお構いなしである。最初から、そんな金が出来るわけがないとわかつてゐる。

大川は、友人である不動産業者の金村に、園子のアパートの件は

相談済みである。

今の相場からいうと六千万円ぐらいのもので、アパートを壊して更地にすれば利用価値があるので、七千万円ぐらいで売れるだろうと言われていた。

「金村さん？ 大川です」

大川は自分なりに大体の相場を掴み、金村が言っていた事が間違いないとわかり、金村の事務所に連絡した。

「前に言ってたアパートの件ですが、ほんとに七千万で売れますか？」

「ええ。更地にすればの話ですが。固まりそうですか？」

金村が食指を動かした。

「金村さんならいくらで買ってくれますか？」

「そうですね……。五千万ですね」

金村がズバリ言った。

「五千万？ もう少し何とかならないですか。七千万で売れるんですから、もう少し色をつけて下さいよ」

「いや、五千万が目一杯ですよ。現在八世帯が入っているでしょう。それを出すのに結構かかりますからね。ましてどんなのが入ってるかわからないですから。変なのがいたらそれこそ赤字ですよ」

「そんなお手のもんじゃないですか」

「まあね」

金村がハハハと笑った。

「とにかく、出すのは手を尽くしていろいろやってみたとしても……。五千万が目一杯だな」

金村は、五千万円を頑として譲らない。

「わかりました。金村さんには負けました。五千万で譲りましょう」
大川はあっさりと折れた。

それも当然である。二千万円で買ったものをすぐに五千万円で売れるのだから、こんな旨い話はない。

「それでは明日、そちらへ行きますので。手付一千、残金一カ月後。

それでいいですね」

「いいでしょう」

商談はあっさりと成立した。

大川は三千万円の儲け。その中から三割の九百万円を恒夫にやる約束である。

金村は、七千万円で売れて二千万円の儲け。ただし、入居者を出さなければいけないので、半分ぐらいになるかも知れない。

それにしても、旨い話である。

5

園子と恒夫は、あれ以来、毎日午後一時になると二人揃って例のルーレット台に座った。

二日目は百五十万円、三日目は百三十万円、四日目は百二十万円と、儲けていた。

「減ってきたけど、確実に儲けてるわね」

園子が嬉しそうに言った。

「そうだろう。目標まですぐだよ」

恒夫の耳には、アパートが五千万円で売れた事が入っていた。

「あんたにも少しあげなくちゃね」

園子がバッグに手を入れ、札束を出そうとした。

「いや、俺はいいよ。あのスリルを味わうだけで満足だから。それに俺んところは金持だから」

恒夫が苦笑した。九百万円の他にもっと貰っては申し訳ないと思っっている。

そんな話をしている間にも、アパートを買った金村は、若い衆を使って入居者を追い出しにかかっていた。

そのやり方は厳しく、入居者の大半は出て行ったものの、二家族が金村と対立した。

売買契約書では栗村修一から大川に売り渡され、さらに金村に売

り渡されていた。もちろん価格はマジックで消され、買い戻しの特約も消されていた。その二通のコピーを貰い、納得がいかなと二家族が登記所に行き、名義はまだ栗山になっているのを確認した。

そして、話し合った結果、夜遅くになり二家族が栗山家へやって来た。

栗山修一は、仕事の疲れから夜は早く寝る習慣であるため、妻の園子が応対した。

「私たちが住んでいるアパートの大家さんは、栗山さんに間違いないですよね？」

三十過ぎの男が聞いた。

「ええ、そうですけど。何か」

園子が不安そうに聞いた。

その三十過ぎの男の口から、園子は大変な事を聞いた。幸い、夫は寝ていたので今日のところは助かったが、どういう事が明日になったらすぐにでも恒夫に連絡して、事の真相を探らねばならなかった。

（しかし、そんな事が・・・）

園子はまさかと思いつつ、なかなか寝付かれなかった。

翌朝、夫が出た後すぐ恒夫に連絡した。

「恒夫さん？ 大変なのよ。すぐにウチに来て！」

園子が命令口調で言った。

「何があつたんです？」

恒夫は半分寝ぼけ眼で聞いた。

「アパートよ。アパートが大変なのよ。とにかく早く来て頂戴！」

園子は自分の言いたい事を言って、受話器を置いた。しばらくして、恒夫が駆けつけた。

「アパートがどうしたって？」

玄関の框に上がるや否や、大きい声で言った。すぐ脇の応接間で、園子がこわい顔をして立っていた。

「これを見てよ」

恒夫に二枚の紙を渡した。例の売買契約書のコピーである。

恒夫は椅子に座り、二枚の紙を凝視した。

「これはどういう事だ？」

恒夫が白々しく言った。

「こつちが聞きたいわ！ あの大川って男、私を裏切ったのよ。それしか考えられないわ。その金村という人に売って、金村がチンピラを雇ってアパートの入居者を追い出してるらしいのよ」

園子はそれだけ言うと、頭を抱えてしまった。

「契約書の特約条項のところが白くなっている」
(消してコピーしたんだな)

恒夫は、上手に出来たもんだと感心した。

「一カ月の猶予があるんだから、あんた、一緒に行って！」
園子がこわい顔をして睨んだ。

「ああ、行こう。契約書にちゃんと買い戻しの特約が入っているんだから大丈夫だ。これは何かの間違いだよ」

恒夫は、慰めの言葉をこの程度しか言えなかった。

二人はタクシーに飛び乗り、大川の事務所へ行った。

血相を変えて園子が入って来たのを見て、大川は待つてましたとばかりに奥の部屋に通した。

先ほど、恒夫から連絡済みである。

「大川さん！」

園子は座るのももどかしく、大川に詰め寄った。

「なんでしよう」

大川は落ち着き払っている。

「まあ、座りなさい」

大川が二人を座らせた。

「この契約書は何ですか！」

園子が強い口調で言い、二枚の紙をテーブルに並べた。

「それがどうかしましたか？」

大川はケロツとしている。

「私との約束はどうなってるんですか？ コピーには消してあるけど、私の持っている本物にはちゃんと買い戻しの特約が入ってるのよ。しかも一カ月という期限まで入ってるのに、金村っていう人に売るとはどういう事？」

「それは私の勝手でしょう」

「冗談じゃないわ。あなたは待つてくれると私に約束したのよ。しかもお金が出来ない時は相談に乗ってくれとも言ったじゃない」

「奥さん。私だって事情があるのですよ。あの時は確かにそう言っただかも知れないけど、私の内情が変わってしまったのです。ここるところちよつと苦しくなりましてね、急に金が必要になったのです。口で約束した事なんか、守れなくなった時はどうしようもないのです」

大川は、あくまでも落ち着き払っている。

「そんな……。呆れたわね」

園子は悔しくなった。女だと思ってバカにされているのがよくわかった。

「じゃ、この買い戻し特約は何なのよ。口約束じゃなく、契約書にちゃんと書いてあるのよ。出るところに出れば私の勝ちだわ」

園子が強気に言った。

「ほほう。奥さん、そんな事を口に出すもんじゃありません。岩渕さんの知り合いということで大目に見ていたのに。わからない人だ」

「脅すのね」

「まさか。そんな事をしたら私が大変になる。私はこう見えても紳士なんですからね」

「だったら特約条項通りにして下さい」

「いいですよ」

大川がすんなり承諾した。

「それじゃすぐに用意するわ。残金の一千万はまだ貰ってないから一千万でいいのね。すぐに持って来ますから、契約を白紙にして頂いて、権利証を返して下さい」

園子の隠し預金には、ルーレットで儲けた金がすでに一千万円を超えていた。

「困った人だ」

大川が園子を睨んだ。

「いいかね奥さん。二千万で買ったものを、いくら買い戻がついているからといって二千万で売るバカがどこにいるんです？　そうでしょ、岩渕さん」

「ええ、まあ」

恒夫は曖昧な返事をした。

「じゃ、いくらならいいのよ！　利息を付ければいいのね」

「義姉さん、そんなもんじゃ納得しないよ」

恒夫が申し訳なさそうに言った。

「なによ。買い戻しってというのはそういうのと違うの？」

園子が恒夫に聞いた。

「普通はそうだろうけど、今回は無理にお願いしたんだし、事が事だから」

恒夫が大川に遠慮しながら言った。ここで、あまり騒ぎ立てては九百万円の分け前が減ってしまう。

「何が事が事なのよ。ギャンブルするお金を借りようと、物を買うお金だろと同じじゃないの！」

園子はまだ騒ぎ立てている。

「奥さん。この買い戻しの特約に、いくらで買い戻すと入れなかったからいけないのですよ」

大川がもつともらしく言った。

「そんな事、私にはわからないわ。恒夫さん、あんたは知ってたの？」

「いや、俺もこういうのはさっぱりで」

恒夫が頭を掻いた。

「だったら大川さんが説明すべき事でしょ？」

「おっと、私にそんな事を言わないで下さい。私は買って戻す方な

んですよ。奥さんがいくらで買い戻すからと条件を言うのが当たり前でしょう。あの時、それがなかったものですから、これは買い戻すつもりはないと思ったのです」

「卑怯よ」

園子が唇を噛んだ。

「卑怯呼ばわりは止めて下さいな。私は人助けだと思ってやったまですすからね」

「わかったわ。じゃ、いくらならいいの？」

園子が、鋭い目で大川を睨んだ。

「五千万」

「えっ、五千万？」

「そう五千万。一億でもいいんですよ。この場合、いくらでも私の言いなりに出来るのですから。なんたって私のものなんですから」

園子の唇に血が滲んだ。

「わかったわ。五千万で買うわ。恒夫さんが証人よ。後で言った言わないなんて、言わせないからね」

園子は、カッカリしながら大川の事務所を出た。

「あんな事言つて、あては？」

恒夫が心配になり、聞いてみた。

「あの一千万と、主人の通帳から三千万降ろすわ」

園子は、こうなればしかたがないので、夫の預金に手をつける事を考えた。

「恒夫さん、いいわね。四千万で一発勝負よ」

何度もやっている内、園子に度胸が着いていた。一度も負けた事がないという事が、その気にさせたのである。

「四千万が八千万になれば、三千万を通帳に戻し、五千万であの大川の頬つぺたをひっぱたいてやるわ」

普通の奥さんの言う言葉ではない。と気がついて、園子は苦笑いした。

その夜、最後の仕上げをするからと、恒夫が久夫に話した。

「明後日やる。用意しておいてくれ」

恒夫が言くと、久夫はパチンコ屋を出て行つた。

恒夫のビルに入っているパチンコ屋は連日大盛況である。園子がたまたまそのパチンコ屋に寄つたのが運のつきで、その後ゴロゴロと地響きを立てながら坂道を転げ落ちたのである。それは、何人かのハイエナによってである。

久夫に話した恒夫の考えは、瀬沼の所で四千万円を賭け一発で負けるのは簡単だが、儲けるのは組織だけで恒夫も久夫も瀬沼も、何の見入りがないのである。そこで、久夫は自分の知り合いの所へ瀬沼を出張させ、分け前を頂くという事を考えた。

違う場所となれば園子は拒むだろうから、瀬沼をわざわざ出張させるのである。もちろん、組織には内緒である。

「義姉さん」

東西銀行で四千万円を降ろした園子は、現金を恒夫に持たせ、自分分はさつさと賭博場の方へ歩いて行つた。

「今日はそつちじゃないんです」

「えっ？」

「四千万もの金はあるところじゃ張れないんです」

恒夫が園子の側に来て、耳元で言つた。

「大きい勝負は違う所なんです」

「そう。じゃ、あのディーラーはいないの？」

園子は不安になった。

「いや、今日は大きい方へ行くと伝えといたので、大丈夫です」

それを聞いた園子は安心したのか、恒夫が待たせておいたタクシ―に乗り込んだ。

タクシ―は二十分ほど走り、ある大使館の横で停まつた。

「ここから少し歩きます」

タクシーから降りると、恒夫がスタスタと歩き出した。広い道から狭い路地に入り、小さい雑居ビルに入り地下に降りた。中廊下があり、左右に二軒つつスナックやら居酒屋が並んでいた。恒夫がその一軒のスナックの扉を開けた。中は普通のスナックで、昼間なので店はやっていず、恒夫は店の中を横切り奥のドアを開けた。扉の向う側は賭博場になっており、ルーレットが置かれていた。そして、その横に瀬沼が立っていた。

「ほら、あの男です」

恒夫が園子に言った。

「ほんとだわ」

ここは賭博場ではなく、久夫の知り合いのスナックで、その奥に空いている部屋を簡単に改造したものであった。そしてルーレットを設置し、テーブルを作りもっともらしくしたものであった。

「まだだれも来てないのね」

園子は、何の疑いもなく恒夫に言った。

「そうですね。こっちはレートが大きいので、昼間は少ないみたいです」

恒夫の言葉は、もっともらしく聞こえる。

そこへ、久夫が入って来た。

「やあ、岩渕さん」

「どうも」

恒夫が軽く頭を下げた。

しばらくして、瀬沼の立っている後ろのドアが開き、二人の紳士が入って来た。

一人はルーレットの隣に置いてあるテーブルに着き、箱からチップを取り出した。もう一人は入口のドアの所へ行き、立ったままにこりともせず正面を向いた。

実は、テーブルに着きチップを取り出した人物はこのスナックのマスターで、久夫の知人である。立って正面を向いているのは、その友人であった。

「そろそろやりますか」

久夫が園子に聞こえるように言い、テーブルの男の側へ行った。

「よし、チップに替えよう」

恒夫が手提げバッグを持ち、久夫の後ろに並んだ。その後ろに園子が並び、久夫は用意していた一千万円の束を園子に見えるようにバッグから出し、テーブルの上に置いた。

久夫は一千万円を十枚のチップと交換し、席に戻った。なんと、一枚百万円である。

それを見た園子は、変な納得をした。大きい掛け金はこっちなんだと、勝手に解釈した。恒夫は手提げバッグから四千万円の札束を出し、四十枚のチップと交換した。

園子を陥れるため、みんながグルなのである。そうとも知らず、園子は目をランランと輝かせ、テーブルに着いた。

まずは、恒夫は様子を見ようと何もせず、赤に置いた久夫のチップを見つめた。

恒夫は、わざと慎重に構えているところを園子に見せた。一回二回と我慢したのである。その間、久夫は二回とも当てていた。

「いいか義姉さん。ディーラーの癖を久夫はよく知っている。かといって絶対とは言えないところがあるのは知つての通りだが。久夫は今癖を見定めているはずだ。もう少し様子を見よう」

恒夫が園子の耳元で囁いた。

「ええ」

園子は恒夫の顔を見る事なく、回るルーレットを凝視していた。

赤、赤、黒、赤と四回連続、久夫が当たっていた。

そして五回目。久夫は黒に有りつたけのチップを賭けた。

「よし、今だ」

恒夫の声に、園子は四十枚のチップを黒に賭けた。

五十四枚のチップが黒に乗っている。五千四百万円分である。

園子はワクワクした。

「ねえ、これで勝ったら、帰ってもいいんでしょ」

園子が恒夫に聞いた。

「そりゃ勝手さ。いくら勝とうが負けようが自由さ」

恒夫の言葉に園子はウンウンと頷いた。

ルーレットが回った。そして、瀬沼の手からボールが弾き出された。ボールが回り、ストンと中に落ちた。

その瞬間、アーツという大きなため息が部屋全体を揺るがした。

ボールの落ちた場所は赤だった。

園子は大きなため息と同時に、焦燥した顔をした。

「負けたわ」

園子はルーレット台を凝視し、ボソツと言った。そして、顔を硬直させて恒夫に言った。

「家を担保にしてもう一度やりましょうよ」

園子は、顔がこわばって行くのが自分でもわかった。

外は、秋風が吹いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4171m/>

飽食の罌

2010年10月8日13時41分発行